



栄中だより

栄中開校57年「いいとこ探しの学校」自主・自律・親和・協力 笑顔あふれる栄中学校

草加市立栄中学校
令和2年度2月号
令和3年2月1日

箱根駅伝Ⅱ区

～新たな夢の続きを走りだす～

校長 今泉 正之

大寒が過ぎ、明日は節分、明後日は立春。寒さの中にも少しずつ春が近づいて来ています。3年生は私立の推薦入試を終え、進路が決定した生徒と、県公立高校の受検まで最後の追い込みに入っている生徒が教室で生活していますが、どの教室を覗いても、生徒が周囲に気を使いながら生活している様子がわかり、改めて気遣いのできる3年生に感心しています。県公立入試まであと4週間、卒業式まで6週間。最後まで全力で駆け抜けて欲しいと思っています。

さて1月2日、3日にお正月恒例の箱根駅伝を御覧になった方も多いのではないのでしょうか。往路が創価大、復路が青山学院が制し、総合では駒澤大学が最終10区で逆転優勝し、大きな話題となりました。この復路優勝した青山学院大学では毎年、大会終了後に3年生までの駅伝出場メンバーから外れた選手が出場し、校内の競技場で5000mを走る記録会が実施されています。この記録会に4年生のS選手が特別参加し、14分10秒9で3位となる力走を見せたといいます。このS選手は今年の大会で10区にエントリーされましたが、当日の選手変更で出番がなく、代わりに出場した当時の2年生が優勝のゴールテープを切りました。そして雪辱に挑んだ今年の大会、これまで以上に走りこんだS選手は16人の登録メンバーに選ばれました。箱根駅伝は10区間の競争ですから、このメンバーから6人は走ることはできません。最終10区の選手候補は4年生のS選手と2年生のN選手。悩みに悩んだ原監督が、12月30日のメンバー発表で選んだのは2年生のN選手。主将で怪我で大会に出られなかったK選手はその時のことを「Nの名前が呼ばれた時、Sは顔色一つ変えませんでした。Sが4年間努力してきたことはチームの誰もが知っています。4年生の中で一番練習で走ったと思います。…でもがっかりした表情をまったく見せなかった。その強いメンタルに驚いたし、感動しました。」と話し、原監督の妻で寮母の美穂さんは「Sは潔かったですね。『惜しかったね』と声をかけたら『僕よりNの方が強いです』と。恰好よかった。」と目を潤ませながら話したと言います。

この5000mの記録会のゴールラインをS選手は派手なガッツポーズで越え、その姿を4年生全員が笑顔で迎えました。選手発表と記録会の走りについてS選手は言います。「僕がふてくされたりしたら、チームの雰囲気が悪くなります。来年も再来年も必ず僕のように11番目の選手がいる。後輩に11番目の選手の見本を見せたかった。僕ができることはそれくらいですから」。S選手が駅伝に全力で取り組み、チームを愛していたこと、チームの仲間がそれを認めていたことがわかります。この箱根駅伝を「絆大作戦」と名付けた原監督は「優勝できなかったけれど絆大作戦は成功。点数をつけるなら、優勝できなかったということで90点。残りの10点は社会人になった後、みんなで一生かけて、積み重ねていって欲しい。」と語りました。この4年生は卒業し、それぞれの道を歩んでいきます。そしてそれぞれの「箱根駅伝Ⅱ区」を走り始めます。

あと2か月で卒業を迎える3年生。卒業は人生のゴールではありませんし、自分の思い描く形ではないかもしれませんが、最後まで全力を尽くしたという思いと仲間との絆は、必ずそれぞれの道での力になるはずです。卒業という中学校生活のゴールはまた、新たな夢に向かって走り出すスタート地点なのです。